



「これ、おいしいんだよお、食べてみてよ」。道草館前の販売テントは、この時期地元客に混じって、立ち寄る観光客のお客さんが絶えません。お客さんとの気さくな掛け合いの場は、観光客と住民が直接触れ合う窓口です。売り手である一方、新鮮で安心な「食」の作り手としてのひと言は、お客さんにとっては信頼できる食のアドバイス。元気な売り声は、町一番のガイド役でもあります。

J Aひがしかわ女性部総出の一大イベントが近づいてきました。それは「てっぺんまつり」の「かあちゃん食堂」。今年のメニューは「宮崎お助け牛丼」です。口蹄疫（こうていえき）被害の宮崎県農家を支援しようとして、JAグループを通じて収益金を宮崎県に送る計画。完売できるかどうか、畑中さんから農家のかあさんたちの腕の見せどころ。

になります。



米作中心の専業農家。会社勤めからUターンして戻った長男雅晴さん（45）は頼もしい後継者。田植え、収穫期には旭川市内に住む長女利香さん（43）も力強い担い手として畑中農場を支えてくれるので、今は農業を楽しんでいるようです。

主役は道産牛肉。そこに玉ねぎ、しらたき、糸こんにゃく、しょうが、小ねぎを散らして、東川版ベーシック牛丼の完成です！

去年は約1千200食分のご飯を炊きました。今年は1千食分を販売します。ご飯は1回30分まで炊ける大釜2器を用意（この大釜、昨年は舞台裏で大活躍しました）。ご飯が主役なので「みんなの目に見えるように、どろん」と前に出して…」と演出にもひと工夫します。

青年部が担当する「てっぺんぶっかけそば」も500食加わり、合計約1千500食分を販売予定。実際に作る量は、さらに組合員用として約1千食分ずつ加わるので大忙し

「朝顔の会」の産直販売は、1995（平成7）年から始まって15年目。当初は農協店舗裏の駐車場で売り始めました。「始めたころは、今みたいはどこにでも直売所があった時代じゃなかったから、すごく人気あったんだよ」。

野菜類を並べ始めると、町内の方が待っていたかのように新鮮な野菜を買いに来るのですが、観光最盛期のこの時期は、店開き前から観光客がテント前に集まります。9割は観光客。今日も元気な声が響いています。

宮崎応援企画が具体化した今年のおてっぺん祭り企画会議(7月13日、農協で)



てっぺん祭り「かあちゃん食堂」で奮闘する女性部の皆さん(昨年8月30日)



田植え機、コンバインの運転も「ドンとこい」(昨年5月の田植えで、長男のお嫁さん・まゆみさんと一緒に)

はたなか りつこ  
畑中 律子さん / 農業 / 東雲  
東旭川村(現旭川市)出身。67歳。夫研一郎さん(71)、後継者の長男雅晴さん(45)、まゆみさん(46)夫婦は、約36%を経営する入植3代目。律子さんはその大黒柱です。東川町農協女性部長。女性部はJAひがしかわ最大の夏イベント「大雪源流てっぺんまつり」(今年は8月29日開催)で、各地区支部長の皆さん総出の「かあちゃん食堂」を毎年切り盛りしています。この食堂も今年で4年目になります。